

書評

小原敬士

『近代資本主義の地理学』

大明堂昭和40年5月277ページ

わたくしは1964年に、Melbourne 大学をはじめとして、オオストラリアの大学をいくつか訪れる機会をえたが、オオストラリアでは経済地理学の研究が、わが国の現状と比較して、格段に活発であるとの印象を強く与えられた。オオストラリアの経済発展の可能性が、今日なお地理的条件に依存するところのはなはだしいことがその原因であろうとは、誰にでもすぐ思いつく説明であるが、経済理論が現実を無視して暴走するのを制御するために、経済地理学は、経済史学とともに、大いに重要視されなければならないとの見解を、かの地の研究者の口から耳にしたことも一再にとどまらなかった。経済地理学に半ば素人のわたくしが、日本の経済地理学界の現状について、少なくとも研究者の数の点で、漠然とした不安の念を懐いているのは、そうした事情も手伝ってのことである。

さて小原敬士教授は、周知の如く、つとに W.G.East, *The Geography Behind History*, London, 1938 の邦訳を刊行し、さらに1950年には、『社会地理学の基礎理論』を上梓し、わが国における歴史地理学なり経済地理学なりの研究に忘れることのできない足跡を印したのであったが、“過去10年間あまり、職務上、アメリカ経済の研究に忙殺され、経済地理学からはやや遠ざか”るのよぎなきに至ったのであり、これは斯学の現状に鑑み、まことに遺憾と言うべきであった。ところが、“最近、半ば他律的な動機から再びこの研究領域に復帰することとなり、ここにかつて発表された雑誌論文を一書にまとめて世に問われたのである。すなわち、小原教授は、斯学に関する従来の研究成果を整理再録することによって、新研究への発足を暗黙裡に約束されたものであろう。およそ斯学に関心をもつ学徒ならば、これを慶賀すべき一大朗報と感ぜないものはないであろう。

本書は‘方法と視角’と題する第1部と、‘近代資本主義の発展過程における地理的条件’と名づけられた第2部とに分けられている。著者の説明に従えば、前者は著者の“理解するかぎりでの歴史地理学的研究方法の性質を論じたもの”であり、後者は“それぞれの地域の地理的

条件の現実的作用を、その地域の資本主義的発展を背景として究明しようとしたもの”である。著者は地理学におけるその立場を、“気候、風土、土壌、地形等の地理的条件をつねにその社会性と歴史性においてとらえようとする”ものであると記し、従って著者にとって“もっとも興味ある問題は、気候、風土、地形、地質などの自然条件が、人間社会の発展過程のそれぞれの段階において、いかなる意義をもち、いかなる役割を演じたか、ことにそれらのものが、近代資本主義の段階において、いかなる役割を演じたか、そして、そのような自然的条件と、その他の社会的諸条件との制約のもとに、資本主義社会の諸現象がいかなる地域的表現をとってあらわれているか”であると述べている。

第1部で論究された指導理念に基づいて、第2部においては、イギリス、アメリカ、および日本の特定の地域についての実証的な研究が行われている。地理学の専門家でないわたくしが、本書の書評者に選ばれたのは、第2部の中に、わたくしが専攻しているイギリスの若干の地域の経済的発展に関して、その自然的条件との関係を考察した論文が収められていることによるものと考えられる。とすれば、特にそのような論文について、以下に若干の管見を開陳することが、編輯者の期待に副う所以であろう。

第2部に収められた9篇の論文の中で、イギリスに関するものは、第3、4、5および6章、すなわち、‘イギリスにおける毛織物工業の発展と、その地理的条件’、‘ランカシャー木綿工業の発展と、その歴史地理的条件’、‘イギリスにおける石炭資源の現実化過程’ならびに‘マーシーサイドの産業構造’の4篇である。これら4篇の中で、経済史研究者の間にもっともよく知られ、今日に至るまでわが国の幾多の著書論文に引用され、いわば古典としての地位を獲得したのは、第4章の Lancashire の綿業に関するものであろう。この論文は、1950年から1952年にかけて『社会経済史学』誌上に3回に分載されたのであり、わたくし自身それにはじめて接した際与えられた感銘は忘れえないし、ことに、第2回分載分と第3回分載分との間に1年以上の中断があり、後者の発表を待ちかねた記憶はいまなお新しい。

イギリスの綿業はなぜ Lancashire に集中したか。いやしくもイギリスの経済発展に関心をもつものにとって、この解明は大きな課題である。それについて、或いは自然的な、或いは歴史的な原因が、種々挙げられてきた。もはや今日では、その中の1つによってすべてを説明しつくすことができると思うものは、たといあったとし

ても、言わば例外にすぎないであろう。とはいいながら、それら多数の原因が、すべて同じ程度に貢献したわけではない。集中への貢献度には、当然差がある。それぞれ2, 3にとどまらない自然的条件ならびに歴史的条件の中で、特に重要視しなければならないのは何であろうか。さらに、自然的条件と歴史的条件とのいずれが主役を演じたのであろうか。自然的条件に関しては、著者は10年前に急逝した Wilfred Smith 教授の見解に影響されるところが少なくないようである。(本書の付録に‘故ウィルフレッド・スミス教授を偲んで’という追悼文が収められている。これによって著者が Smith 教授にいかにか傾倒しているかを知りえられる。わたくし自身も、Smith 教授に負うところが少なくないものであることを付記しておきたい。)また歴史的条件に関しては、大塚久雄教授の見解を概ね是認して居られるものと察せられる。そこで著者は、次のように歴史的条件の優位を強く主張するのである。

“木綿工業が外のところではなく、とくにランカシヤ地方におこったのは、その地方の東部では毛織物工業が、その西部では麻織物工業が、古くから存在し、木綿工業の先駆的形態としてのファスチャン工業が発達する技術的基礎が備わっていたこと、その地方には早くから‘小ヨーマン資本家層’が成立していたこと、またそれに照応して、この地方においては産業的自由がいち早く発達し、近代的産業様式の出現を拘束するような封建的制限が永く残存することを許さなかったこと、などによるものであった。ランカシヤの木綿工業はこのような歴史的社会的条件を背景として成立したのであって、そのばあいにおいては、それはランカシヤ地方のもつ固有の自然条件とは必ずしも直接の関連をもってはいなかった。”

しかし、Lancashire に綿業を集中させた歴史的・社会的条件は、自然的条件の産物ではなかったろうか。中世の Lancashire が、イングランドの中では人口密度が低く、低開発地域であったことは、その自然的条件に起因するところが多い。Lancashire の土壤は必ずしも農耕に好適とは言えず、農民を惹きつける魅力に乏しかったのである。近世に入ってから、Lancashire の開墾がもっぱら小農の手によって進行したが、特に Pennine 山腹ならびに山麓の丘陵地帯では、農耕は困難であり、牧畜に依存せざるをえなかった。ところが多くの Lancashire 農民の保有地面積は、牧畜経営を黒字にするほどの大きさには程遠かった。従って、家計は牧畜業よりの収入以外の何かによって補われる必要があった。こうした必要が、副業としての繊維工業を肥沃な土壤に恵まれ

ない Lancashire 農村に発達させ、半農半工経営を一般化させた。これが Lancashire の東部高地に綿業を発展させる技術的基盤を形成したのである。としてみると、歴史的条件には自然的条件がきわめて密接に絡みあっている。それにもかかわらず、“直接の関連”はないとして、自然的条件を重要視しないことは果して妥当であろうか。

とはいいながら、上の引用にはじまる‘5. 歴史過程における自然条件の現実化と非現実化’は、この論文の中で、もっとも興味があり、この部分の執筆に著者が1年余の日子を費したことが十分首肯できる力作的部分である。ここでは、Pennine 山脈西側の自然条件が、気候条件、水力、石炭のそれぞれについて、“その歴史的、相対的意義にかかわらしめて明らかに”されているとともに、それが“19世紀以後、現在に至る段階において、しだいに非現実化する過程”が説明され、さらに Lancashire 内部における綿業の地域化・専門化の場合についての自然的条件の演じた役割に論及されている。この中で著者が Thomas Newcomen の発明に高い評価を与えているのはきわめて適切であるが、ただ“蒸気機関を最初に考案した”との断定には異論の余地があるかもしれない。単なる考案だけならば、Newcomen 以前になかったとは言えないからである。Newcomen は実用的な蒸気機関の最初の製作者であった。そして、その時期は1712年であり、場所は Staffordshire の Dudley Castle またはその附近であったと推定されている。さらに、著者は本書中に一度ならず Newcomen が1705年に特許をえたと記しているが、それを裏づける史料は存在せず、現在では1705年特許説を信ずるものは稀有と言ってよい。

本書に集められた諸論文は、これ以外のものも、いずれもその発表の時期において、十分の意義をもち、学界に貢献した珠玉篇である。ただ、最近における経済史学の急速な進展を考えれば、現在もし著者が執筆したとして、同一の記述が依然として行われるであろうか否かについて、疑問を懐かせられる点も若干ないわけではない。わたくしは、著者が経済地理学や歴史地理学の分野に再び十分な研究時間を割くようになったことに絶大な喜びを感じると同時に、かつて著者によって採りあげられ大きな波紋を投ぜられた主題が、その後の内外の研究成果を踏まえて、再度著者の検討の対象となる日を待望するものである。

〔小松芳喬〕